

学校防災教育における学習環境の再構築に関する研究
 Restructuring the Learning Environment for School Disaster Education

○岡田夏美・矢守克也

○Natsumi OKADA, Katsuya YAMORI,

Conventional disaster education, which is conducted independently by schools, has problems for “acquiring knowledge” and developing “active attitude.” It is important to develop “active attitude” by linking “knowledge” with “life and the real world”. In this paper, we will take up an example in which the knowledge of disaster prevention learned at school is linked to learning at educational facilities outside the school. We evaluate that the school has expanded the learning environment and as a result, children's “active attitude” for disaster prevention has increased.

1. はじめに

近年、学校における防災教育が殊に期待されている。内閣府中央防災会議「防災に関する人材の育成・活用専門調査会」（2003）は「世界的にも有数の災害発生国である我が国においては、災害等に関する知識や対処能力を子供の頃から身に付けておくことが、この国に居住し、生活していく上での必須の条件である」とし、特に災害全般に対する理解に関する基礎部分は、小中学校の義務教育の中で行うことがふさわしい(城下・河田, 2007)と考えられているからである。

防災教育は、様々な危険から児童生徒等の安全を確保するために行われる。「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議 中間とりまとめ」（2011）では、防災に対する「知識」を「主体的」に学ぼうとする姿勢が重要であると言及されている。防災教育における先行的な研究でも、「主体性」の育成が強く求められている。その背景には、「知識」は、与えられるだけでは災害イメージを固定化してしまい、それ以上のことを想起できなくなることから、自ら自主的に行動できる能力を育成・向上させる必要がある、という意図を読み取ることができる。

以上より、近年、学校防災教育で求められていることは「主体的に行動する態度」を育成することが、「知識を身に付ける」以上に重要であると指摘されて、「知識」を身に付けるにも学習者の「主体性」が発揮されることが期待され、その実現が要求されている。

2. 「知識」と「主体性」の関係

しかしながら、このような要求には2つの大きな問題点がある。一つ目は、「主体性」は「知識」に先行するものである、というように、教育や学習の場面において、それらに順序を決めることができるのかという点、そして二つ目は、「主体的な態度」とは、学校教育の場で十分に育成されるのか、という点である。

（1）「主体性」は「知識」に先行するのか

「主体的に学びに向かう態度」を「impulse（衝動）」と表現した J. Dewey（宮原訳, 2019）は、「衝動」によって「主体性」が生じるが、それが真に価値を持つには「知識」が必要だと指摘した。「知識」を真に生かすには、やはり「主体性」が必要となる。そこに順序はなく、それらは“同時に”教授され、育成されるべきものであると言えよう。

（2）「主体性」は学校教育のみで育成できるのか

Ruitenbergh (2010)は、学校・学校制度が能動的に学生の主体化を促進することはありそうにない、と述べる。佐伯ら（2000）は、その理由として、学校においては、学習の内容が極めて制度化・効率化されているために、その教育では、知識は脱文脈化され、中立化し、非人称化したものとなってしまっており、本来「生活や実社会」と密接にかかわっているべきはずの知識が、学校や教室や教科がすべての中心になってしまうことで、その学びの内容が現実社会の文脈から乖離してしまっているからだを指摘した。

このような「社会的文脈との関係性が捨象」されている教育では、「主体性」を掻き立てる

「impulse (衝動)」は発生し得ず、「知識」が「主体性」と関係を結ぶことはない。つまり、学校防災教育において「主体性」が課題となるとき、そこには、「知識」と「生活や実社会」がリンクしていない状況があるのである。その根本的な原因は、学校内、あるいは教室の中でのみ行われる、防災にのみ焦点をあてた防災単独のカリキュラムにとどまってしまっていることである。学校、あるいは教室、そして教科という限られた枠の中で、防災だけを取り上げたカリキュラムでのみ議論していることこそが、学校防災教育における大きな課題だといえる。

そこで、「教室以外の“空間”」、「教師と生徒以外の“人”」、「防災以外の“知識”」、「学校以外の“環境”」といったより広い社会的な文脈の中で、学校防災教育に資する学習環境を協調的な形で再構築し、「知識」が「生活や実社会」とリンクし、「主体的な態度」へとつなげることが求められる。

本稿では、紙幅の都合上、学校で学ぶ防災の知識が、学校外の教育施設での学びとリンクした結果、児童の学習への意欲が高まったと思われる事例を取り上げる。

3. 教室での知識を学校外教育とリンクさせる

筆者が、2017年度から約4年間、6年生に防災教育を実施している鳥取県根雨小学校では、最初の防災の授業で、日野町役場内にある山村開発センター内に設定されている鳥取県西部地震展示交流センターで、鳥取県で起こった身近な災害について学ぶことを恒例のプログラムとしている。この施設を管理する担当者Y氏から、鳥取県西部地震発生時の状況や、その後の復興の経緯、継続的な被災者支援の取り組みなどのお話を聞く。Y氏は実際にこれらの取り組みに深く関わっているため、リアルなお話を児童らは聞くことになる。

2017年度の6年生学級には、自宅が全壊したという児童Kさんがいた。Kさんがセンターに展示されている写真を見て「これ、うちの家や」と発言したことで、児童らの関心が一気に集まった。その発言を受けて、他の児童らも「え、どれどれ？」と、その写真に集まった。

その後、担任教諭が児童らに書かせた感想文からは、6年生全10人中4人が、Kさんの家が全壊したことが印象深いと書いていた。他に「一番びっくりした写真は、道路にでかい岩が落ちている写真で、ぼくは、どうやってこんな大きい岩をどかしたのかと思って聞いたら、『重機で動かした。』

と言われました。(中略)でもこんなに多くの被害があったのに死者も行方不明者もいなかったのびびっくりしました」、「心に残った話は、おじいさんとおばあさんが、『休憩しようか』と言って、後ろへ行ってご飯を食べていたら、地震が来ました。前の席にでっかい石が落ちてきたらしいです。でも、おじいさんとおばあさんは無事だったらしいです」、「私の家の写真がありました。家に帰ってからお母さんにその時のことを聞いてみたら、お父さんが家の下敷きになったと言っていました」などの感想があった。

こうした感想からは、Y氏との交流や、Kさんの家の写真を見ることで、学校教育のみではなしえない学習が行われたことを表している。教師や教科書からでは知ることができない災害時のリアルな状況を学んだのである。

4. 知識を文脈的に理解する

こうした事例は、学校教育が、学習環境を広げて防災教育を展開した結果生じた、学習への意欲・関心(主体性)の獲得であると理解することができる。「2000年に起こった鳥取県西部地震」として単に知っているだけだった「知識」が、学校外の人や、学校外の施設と協調することで「自分の住んでいる町のこと」として「生活や実社会」と結びつき、児童らに防災への関心を向けさせることができた。

当然のことながら、これは「主体性」を評価するための客観的な指標であるとは言い難いことは事実である。今後さらに実証と検証を重ね、「主体性の育成」に対する議論を深めていく必要がある。

【参考文献】

- 内閣府中央防災会議(2003),「防災に関する人材の育成・活用専門調査―防災に関する人材の育成・活用について報告―」
- 城下英行・河田恵昭(2007),「学習指導要領の変遷過程に見る防災教育展開の課題」, 自然災害科学, vol.26, No.2, pp.163-176.
- 文部科学省(2011),「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議中間とりまとめ」.
- John Dewey(1915)/宮原誠一訳(2019),「学校と社会」, 岩波文庫, p.55.
- Claudia W. Ruitenberg (2010), "Learning to Articulate: From Ethical Motivation to Political Demands," in Gert Biesta, Philosophy of Education 2010, Philosophy of Education Society.
- 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編(2000), シリーズ学びと文化①「学びへの誘い」, 東京大学出版, p.76.